［律詩］

春望

杜甫

作者

杜甫

七一二年～七七〇年。盛唐の詩人。字は子美。悲愴な作風で唐を代表する詩人。「詩聖」と呼ばれた。襄陽（湖北省襄樊市）の人。号は少陵。先祖に晋の名将で、「春秋左氏伝」の注釈家として名高い杜預があり、祖父に初唐の宮廷詩人杜審言がある。幼少のときから神童ぶりをうたわれた。二十歳頃から十余年の間、河南・山東・江蘇・浙江の諸地方を歴遊した。開元二十三（七三五）年、進士に応じたが落第。この前後にも、何度も科挙に応じていたが、及第しなかった。三十歳頃に結婚して洛陽に住み、三男二女を得ている。天宝三（七四四）年三十三歳のときには、李白や高適と山東・河南の地を放浪し、親交を結んだ。同五（七四六）年頃長安に出、翌六（七四七）年、朝廷が一芸に秀でた者を集めて試験したとき、これに応じたが、その仕官の願いはかなわなかった。同十（七五一）年四十歳のとき、「三大礼賦」を奉って玄宗に認められ、集賢院待制の官を得、同十四（七五五）年の冬、右衛率府胄曹参軍となった直後に安禄山の乱に遭遇。霊武（甘粛省）で即位した粛宗の行在所に馳せ参じようとして賊に捕らえられ、長安に監禁された。至徳二（七五七）年、長安を脱出。鳳翔に移った粛宗のもとにたどりつき、左拾遺の官を授けられた。しかし、乾元元（七五八）年、敗将房琯を弁護したため、華州（陝西省）の司功参軍に左遷され、翌年（七五九）には飢饉のために官を捨て、家族と共に秦州・同谷（甘粛省）を経て成都（四川省）に向かった。成都では、比較的平穏な生活を営み、上元元（七六〇）年には郊外の浣花渓のほとりに草堂を建てている。また、旧友厳武の奏請によって、節度参謀・検校工部員外郎の官を得た。しかし、その生活も長くは続かず、永泰元（七六五）年、厳武が死ぬと、成都を去って長江を下り、忠州・霊安（四川省）を経て夔州（四川省）に二年間滞在。大暦三（七六八）年には、またそこを去って岳州（湖南省）へ移った。潭州・衡州（湖南省）などを転々とするが、同五（七七〇）年、舟中でひっそりと、不遇な生涯を閉じた。その一生を通じて、自己の悲哀を通して、戦乱の世の民衆の苦痛や悲哀を理解し、厳しい響きを持った言葉に結晶させていった。後世「詩聖」の名で呼ばれるのは、誠実なヒューマニズムの精神と、儒家的な信念を持つゆえである。また、常に政治や社会に対して示した深い関心のゆえに、「詩史」の称をも得ている。後世に与えた影響も絶大である。「杜工部集」がある。

出典

唐詩三百首

六巻。清の乾隆二十八（一七六三）年、孫洙編の唐詩の撰集。唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。編者の孫洙（蘅塘退士）については伝がなく、生涯の詳細は不詳である。「唐詩三百首」は、「唐詩選」が圧倒的に盛唐詩を重視して中晩唐詩をほとんど切り捨てたのに対し、各時代より公平な視点で詩を選んでいる。そのため、「唐詩選」には名前さえ登場しない白居易・杜牧らの作品も、「唐詩三百首」には前者が六首、後者が十首採録されている。韓愈・元稹・李商隠・温庭筠らの作品も、「唐詩選」では一、二首しかとられていないが、「唐詩三百首」にはそれぞれしかるべき数の代表作が採録されている。このため中国では唐詩の選集としては「唐詩三百首」のほうが重視され、日本でもその傾向が強まっている。「春望」は五言律詩の部所収。本教科書は、平凡社「東洋文庫　唐詩三百首３」（目加田誠著）によった。

主題

戦乱で荒れ果てた長安の春景色を見つめながら、捕らわれの身の作者は家族や国の運命を思い、自己の老いを憂える。

構成

第一・二句（首聯）…（対句）首都の荒廃と自然の不変性の対比。
第三・四句（頷聯）…（対句）国の運命と家族との別離への嘆き。
第五・六句（頸聯）…（対句）国の動乱の現実と家族との分断の事実。
第七・八句（尾聯）…自己の老いの現実をじっと見つめる思い。
〈詩形・押韻・対句〉　詩形―五言律詩。　押韻―「深」（第二句）、「心」（第四句）、「金」（第六句）、「簪」（第八句）。下平声十二侵韻。
対句―第一・二句。第三・四句。第五・六句。

訓読と現代語訳

①国破れて　山河在り
②城春にして　草木深し
③時に感じては　花にも涙を濺ぎ
④別れを恨んでは　鳥にも心を驚かす
⑤烽火　三月に連なり
⑥家書　万金に抵たる
⑦白頭　掻けば更に短く
⑧渾て簪に勝へざらんと欲す

①（戦乱のために）都は破壊されてしまったが、周りの山や河はもとのままにある。
②この長安のまちにも春は巡ってきて、草木は深い緑をたたえている。
③時代のありさまに心を痛めては、美しい花を見ても涙があふれ、
④家族と離れ離れになったことを悲しんでは、可愛い鳥の声を聞いても心がおののいてしまう。
⑤敵の襲来を告げる合図ののろしは何か月も上がり続け、
⑥家族からの手紙は、大金に相当するように感じられる。
⑦白くなった髪に手をやると、前よりもさらに薄くなり、
⑧もう全く、冠を留めるかんざしさえ、留められなくなりそうである。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷一斉読み。その後、指名によって音読する。その際、対句に注意する。
❸詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹正確に現代語訳する。
❺作者と、この詩の成立の背景について説明する。
❻対句表現を指摘し、それぞれの対句の表現上の特徴、用語の特徴を指摘する。〔**言葉と表現** 1〕
❼全体の展開を理解し、作者の家族への思い、社会・国家への思いを理解する。
❽作品の優れているところ、日本文学への影響などを調べ、討論する。知技(2)ア
❾詩形・押韻について確認する。〔**学習のポイント** 1〕

❷対句部分に注意させ、斉読、指名読みを行う。対句部分は、音読をした際に、きわめて整然としていて、かつ印象深いことに注意させる。
❹グループで共同して訳を作らせてもよい。必ずそれらを発表させ、互いに評価させる。

展開

❺天宝十四年（七五五）に安禄山の乱が起こり、占領されていた長安に捕らわれの身となっていた作者が、家族や国家の運命を思って作った作品である。
❻「構成」の項でも触れたが、本詩は、第一・二句（首聯）、第三・四句（頷聯）、第五・六句（頸聯）が対句で構成されている。頷聯と頸聯を対句にすることは律詩の規則であるが、首聯を対句にする必要はない。しかし杜甫は、首聯から対句を用い、冒頭から、人事のもろさと自然の永遠性を鮮烈に描き出した。
❼冒頭の「国破」から、首都の破壊を嘆いていること、したがって国家の危機を嘆いていることが、容易に読み取れる。また「感レ時」「恨レ別」の語から、時代の不運、家族との別れを嘆いていることが分かる。それらを正面から凝視する詩人の厳しい姿勢にも注意する。
❽対句の分析と重なるが、表現の細部について分析しながら、詩人杜甫の、現実に対する姿勢の厳しさにも注目する。日本文学への影響は深く広いが、最もよく知られているのは、松尾芭蕉『おくのほそ道』の平泉の段である（P一〇三参照）。
　この詩の日本文学への影響を理解しているか、確認する。
❾律詩形式であるため、特に第三・四句、第五・六句が対句でなければならないことを確認させる。この詩では第一・二句も対句になっている。

発問例

● 一五二ページ

問 **第一句と第二句について、**
[中] B 何と何が対比されているのか。
[難] A 何と何が対比されているのか、適切なものを次の中から選べ。
(ア)わずらわしい人の世と雄大な自然。
(イ)荒れ果てた国土と恵み豊かな自然。
(ウ)変化の激しい人の世と不変の自然。
(エ)荒れ果てた国土と緑豊かな長安。

答 A 変化の激しい人の世と不変の自然。

問 **「感レ時（ジテハニ）」（第三句）とは「時代のありさまに心を痛める」ことであるが、どのような時代のありさまか、漢字二字で答えよ。**

答 B (ウ)
戦乱（戦争）

問 **「恨レ別（ワカルルヲ）」（第四句）とは「離れ離れになったことを悲しむ」ことであるが、何と離れ離れになったことを悲しんでいるのか、**
[易] A 漢字二字で答えよ。
[易] B 適切なものを次の中から選べ。
(ア)春　(イ)花
(ウ)友人　(エ)家族

答 A 家族・妻子
B (エ)

問 **「烽火連三月（ナリ ニ）」（第五句）について、**

語句の研究

● 一五二ページ

2 春望　春の眺望。「望」は、遠く眺める、また眺望の意。ここでは、名詞として用いられている。この詩は、至徳二（七五七）年、作者四十六歳のときの作。

3 国　首都。長安を指す。また国家、国家機構とも解釈され得る。そうした意味を重ね合わせながら、直接には首都長安を指していると考えてよい。長安は、現在の陝西（せんせい）省西安市。歴代の王朝がこの地に都を置いたが、隋の都の基礎を受け継いで唐王朝はここに壮大な首都を建設した。当時、西のローマと並ぶ、世界最大の都市だった。しかし天宝十四（七五五）年、安禄山の乱が勃発すると、翌年には叛乱軍が潼関（どうかん）の防衛線を突破して長安に迫ったため、玄宗皇帝は首都を脱出して蜀へ逃れた。かくして長安は叛乱軍の占領するところとなり、城内の各所は破壊・略奪を被った。杜甫は、賊軍に捕らえられて長安城内に連行され至徳元（七五六）年から翌二（七五七）年春まで、長安市内に監禁された。「春望」詩は、至徳二年春に制作された。

3 破　破壊される。「国破」は、「国破れて」と訓読するが、「国家が（外国との戦争に）敗れた」との意ではない。

3 山河　山と川。自然をいう。ここでは、長安の周りの自然。

3 在　ある。存在する。「有」も「あり」と訓読するが、こちらは「場所＋有＋存在物」の形で、「〜に…がある」という意味を表し、場所や保有者が明確な場合に用いる。
（例）「山水有二清音一。」（山水に清音有り。）
山水（自然）の中には清らかな音楽がある。
これに対して「在」は、「主語（存在物）＋在（＋場所）」の形で用いられ、「〜が（…に）ある」の意を表し、何があるかが明確な場合に用いられる。したがってここでは、杜甫の目に、「山河」がまぎれもなく、どっしりと、存在している、という強い印象を伴って映っていることが分かる。

4 城　まち。中国の都市は城壁で囲まれていたので、「城」は、都市全体を意味する。

4 草木深　草や木が深い緑をたたえている。「深」は、深々と茂り、辺りを覆っていること。

1 [中]◉「烽火」は、何を象徴しているのか。
2 [中]Aどのような意味か。
Bを意味として適切なものを次の中から選べ。
(ア)長安を焼く炎は三月になっても消えない。
(イ)長安を焼く炎は何か月も続いている。
(ウ)戦いののろしは何か月も続いている。
(エ)戦いののろしは三月になっても止まない。

答 1 戦争状態が続いていること。
2 A 戦いののろしが何か月も続いていること。
B (ウ)

補 「烽火」が敵の襲来を告げる合図に使われていたことを理解する。

問 第七句に「掻(カキ)」とあるが、なぜ掻くのか、[難]A説明せよ。
[中]B適切なものを次の中から選べ。
(ア)ここ数か月、髪を洗っていないから。
(イ)悲しみやいらだちの気持ちが高じたから。
(ウ)身だしなみを整えるため。
(エ)長い髪が気にかかるから。

答 A 悲しみやいらだちの気持ちが高じたから。
B (イ)

問 第七句と第八句における作者の心情について、

---

5 感レ時 時代のありさまに心を痛める。「感」は、心が動かされること。「時」は、時世、時代の意。時代の不運に心がつき動かされる。

5 花濺レ涙 花を見ても涙をこぼす。普段ならば喜びを感じるはずの花を見てさえ、涙があふれることを。「濺」は、こぼす、あふれ出る意。ただしこの句は「花も涙を濺ぎ」と訓読し、「(時世に心を痛めて)花さえも涙をこぼす」と解することもできる。

6 恨レ別 家族と別れてしまったことを苦しく思う。「恨」は、心残りに思う。苦しく思う意。「別」は、ここでは親しい人々・家族との別れ。

6 鳥驚レ心 鳥の声を聞いても心をおののかせる。普段なら可愛いと思うはずの鳥の声を聞いてさえ、心が痛むこと。ただしこの句も「鳥も心を驚かす」と訓読し、「(別離を苦しく思って)鳥さえも心をおののかせている」と解する説もある。第三句の「花」、第四句の「鳥」を、いずれも主語として読む読み方である。

7 烽火 敵の襲来を告げる合図ののろし。

7 三月 何か月も。この「三月」については諸説あり、①(前年暮れからの)三か月間、②(晩春の)三月、③何か月も、等の解釈がある。本教科書では③をとったが、他の解釈もあり得る。

8 家書 家族からの手紙。

8 抵二万金一 大金に相当する。「抵」は、ひきあてる、相当する意。「万金」は、莫大な金額の意。「金」は、黄金の重さの単位だったが、具体的な重さという意識はほとんどなくなり、「千金」「万金」等の形で用いられ、想像を絶する金額をいう。

9 白頭 白髪。白髪頭。

9 掻 手で髪をかく。「掻」は、具体的には、髪に手指を入れること。ここでは、髪に指が入るままに頭を抱えること。

9 短 少ない。欠ける意。したがって、髪が頼りなくなる。薄くなる意。

10 渾 全く、すっかり。強調を示す。ほとんど、と解釈する場合もある。

10 欲 …しそうだ。「欲」には、三通りの用法がある。①「…したい」、②「…が欲しい」、③「…しそうだ」。ここでは③の意で、傾向・趨勢を表す。

10 勝 たえられる。十分にもちこたえられる。

10 簪 冠を髪に固定するために髪に差し込むもの。日本のいわゆる「かんざし」は、女

［難］［A］**どのようなものか、説明せよ。**

［中］［B］**適切なものを次の中から選べ。**

(ア)我が身の老い、衰えに対する嘆き。
(イ)国や家族のために何もできない自分の無力さに対する嘆き。
(ウ)出世の望みも絶たれ、家族とも会えない不幸に対する嘆き。
(エ)朝廷に再び冠を着けて参列できないことに対する嘆き。

答　［A］我が身の老い、衰えに対する嘆き。
［B］(ア)

問　**この詩の主題は、どのようなものか。**

答　国が破滅の危機にあることと家族と別れてしまったことへの嘆き。

補　「国破」「感レ時」「恨レ別」等の語から、それははっきりと分かる。「恨レ別」という個人的な嘆きと、「感レ時」という個人を超えた社会的な嘆きが、緊張感をもって、互いに鮮明にし合いながら描かれていることに注意する。ただ単に個人の嘆きに終わるのではなく、逆にただ単に国家の運命を嘆くのでもなく、その両方が、相互に行き来し、支え合っているのである。

問　**この詩の対句表現を全て抜き出し、それぞれを二行に並べて書け。**

答　「構成」「学習活動のポイント」等を参照。二句ごとに、右左に並列してノートに書き写し、対句が対称性を持っていることを視覚的に確認させる。ことに返り点が同じように出てくることに注目させる。さらに、文法構造・品詞等も左右対称になることに気づかせる。

(板書例)

対句
- 烽火（主語・名詞）　連ニ（述語・動詞）　三月（補語・名詞）
- 家書（主語・名詞）　抵ニ（述語・動詞）　万金（補語・名詞）

問　**この詩の優れた表現と思われる部分をあげ、その理由を述べよ。**

補　各自に自由に述べさせたい。ことに、なぜその表現をあげるのか、その理由を述べさせる。

問　**この詩の日本文学への影響について、知っているものをあげよ。**

答　松尾芭蕉「おくのほそ道」平泉の段。

問　**詩形・押韻を調べよ。**

答　「構成」参照。

性の髪飾りであるが、中国では、身分のある男性が冠を付ける折にそれを留めるためのピンをいう。ただし、女性の髪飾りを指す場合もある。中国では、貴族・士大夫は人前では髪をあらわにせず、必ず結い上げて冠を付け、それが落ちないよう「簪」を差し込む。したがって簪には公的な場における士大夫を象徴する意味があり、その簪もさせなくなることは、老いと同時に、公的な場に立ち得ないことをも暗示する。

鑑賞

この詩は、杜甫の詩の中でも最も人口に膾炙する作と言ってよい。内容面については、すでに「学習活動のポイント」「発問例」「語句の研究」において解説しているので、ここではもっぱら形式面の工夫について解説を加える。

律詩の形式は、一般に、首聯は導入部として散句（非対句）で作詩の場面などを設定し、頷聯と頸聯は詩の中心となる描写を対句で行い、尾聯は再び散句を用いて詩意を示すことが多い。だがこの詩は、首聯から対句による描写を始めることで、いきなり杜甫の感慨に読者は引き込まれることになる。もし散句であれば、「春望」というタイトルが示すように、どこか城楼などの高い場所に杜甫が登ることをまず述べることもありえるのだが、そうした前提的描写は省かれ、「国破」という強い句が現れ、それと対照的に「山河在」という句が呼応する。「城春」と「草木深」は同様に主述構造が繰り返されているが、ここは第一句のように対照的ではない。また、第二句は「山河在」の具体的な状況について解像度を上げて春の季節のありさまを描き、頷聯への導入ともなっている。

頷聯は、幸福な季節の象徴として描かれる春の花や鳥がむしろ悲哀の対象（悲哀の主体）となっていることをうたい、頸聯は、一転して、その不幸な時間の長さを対句で示す。また頷聯までは二字と三字のリズムの切れ目がそれぞれ述語をもつ意味の切れ目ともなり、一句に二つの述語が配置される緊密感を出していたところ、頸聯は一句で一つの主述構造をとる（「烽火」「家書」はそれぞれ「連三月」「抵万金」の主語）ことでリズムを変え、切迫した悲哀の感情から長く続く憂愁への展開を支えている。

尾聯はさらに「白頭」を主語として二句が連続する構成をとり、自らのこされた時間の少なさ、公的な将来にも見通しが見えないことを締めくくりにふさわしい散句でうたう。表現としては、憂愁ゆえに「白頭」を「掻」くということ、髪の「短」がこの先の人生の短さも示そうとしていることの二つを理解すれば、「更」という字が、憂愁ゆえにいっそう老いが深まることを強調する役割を果たしていることも見えてくるだろう。

総じて、この「春望」は、描かれた情景と感情の切実さはもとより、律詩の形式としてもさまざまに工夫が凝らされていることに注意が必要である。そのすべてを教室で説明するのは過重であるが、一端なりともかみ砕いて説明する機会があれば、漢詩の表現技巧についての理解を深める助けになるであろう。

八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶二元九一

白 居易

作者

白居易

七七二年〜八四六年。中唐の詩人。字は楽天。太原（山西省太原市）の人。号は酔吟先生・香山居士。幼少より文才を現し、貧困の中で刻苦勉励した。貞元十六（八〇〇）年、進士に及第。このとき、終生の友元稹も合格している。その後、秘書省校書郎を授けられ、元和元（八〇六）年、才識兼茂明於体用科に応じ、元稹が首席、白居易は次席で合格した。この年、盩厔（陝西省周至県）の尉を授けられている。翌元和二（八〇七）年翰林学士となり、同三（八〇八）年には左拾遺に就任。元和五（八一〇）年、京兆府戸曹参軍に転じたが、翌年、母陳氏の喪に服して退任し、喪が明けた元和九（八一四）年、長安に召喚されて太子左賛善大夫となった。翌年、武元衡暗殺事件に際して、即座に賊を逮捕するよう上奏したことが越権行為とみなされ、江州（江西省九江市）の司馬に左遷された。元和十三（八一八）年には忠州（四川省忠県）の刺史に任ぜられたが、同十五（八二〇）年、穆宗が即位すると、再び都に召喚されて司門員外郎となり、次いで主客郎中・知制誥に任ぜられた。翌元和十六（八二一）年、中書舎人となったが、長慶二（八二二）年には、自ら外任を希望して杭州（浙江省杭州市）の刺史となった。ここでは、治水工事に力を注ぎ、銭塘湖の利水事業などを成し遂げた。長慶四（八二四）年、太子左庶子に任ぜられ、東都洛陽に分司された。この冬、元稹の手によって「白氏長慶集」の編集が完成した。宝暦元（八二五）年、蘇州（江蘇省蘇州市）の刺史となったが、翌年には眼疾を患い、辞任して洛陽に帰った。太和元（八二七）年、秘書監に就任し、紫衣と金魚袋を賜った。太和二（八二八）年、刑部侍郎を拝したが、病気を理由に洛陽に退隠した。その頃長安では牛李（牛僧孺と李徳裕）の党争が始まっていた。太和二（八二九）年、太子賓客として洛陽に分司され、その後、河南尹・太子賓客分司・太子少傅などの官を歴任し、会昌二（八四二）年、刑部尚書をもって致仕した。没後、尚書右僕射を追贈されている。友人の元稹と共に、杜甫の社会批判の精神を継承し、数多くの諷諭詩を作って「新楽府運動」を起こしたが、晩年は閑適詩を専ら作成した。自分の詩を諷諭・閑適・感傷・雑律の四種に分類し、自らは諷諭詩を重視したが、世人の評価が高かったのは、感傷詩や雑律詩であった。その詩は、「元軽白俗」（元稹は軽々しく白居易は俗っぽい）と評されるように、口語や俗語を避けない平易流暢な表現を目指すものであった。我が国の平安朝文学への影響は計り知れないものがあり、菅原道真の漢詩や紫式部の「源氏物語」の成立は白居易の文学を抜きにしては考えられない。韓愈と共に「韓白」と併称される。「白氏文集」がある。

出典

白氏文集

七十一巻。白居易が自らの詩文を集めて編集したもの。もと七十五巻あったが、それは一時の編ではなく、白氏長慶集五十巻（長慶四年・八二四年）・後集二十巻（太和二年・八二八年）・続後集五巻と漸次集められて、会昌五（八四五）年に成ったものである。その間にも、六十巻（東林寺本。太和九年・八三五年）、六十五巻（聖善寺本。開成元年・八三六年）、六十七巻（南禅寺本。開成四年・八三九年）と、別個にたびたび集められている。現在、もとのものは伝わらない。現存するものは七十一巻である。通行しているものの中にも、配列や字句に異同が見られる。中でも、宮内庁所蔵の「白氏長慶集」七十一巻は、我が国、那波道円の古活字本（元和四（一六一八）年。北宋刊本に由来している）であり、前集・後集・続集の体制を整えて文集の旧を伝え、最も信のおけるものとされる。「八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶二元九一」は巻十四所収。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　白氏文集三」（岡村繁著）によった。

主題

中秋の名月の夜、たまたま宮中に宿直した作者は、遠く江陵に左遷された親友元稹（げんしん）を思い、その身の上を心配する。

構成

第一・二句（首聯）…壮麗な宮中の建物に夜は更け、私は翰林院に宿直をしている。〈場面の設定〉
第三・四句（頷聯）…（対句）昇ってきた満月の光には、遠く離れた親友の元稹の心が見えるようだ。〈月の光による直感〉
第五・六句（頸聯）…（対句）君のいる江陵ではもやが漂い、私のいる宮中では時を告げる鐘の音が響く。〈友と自分の居場所の対比〉
第七・八句（尾聯）…江陵はじめじめしているので、君がこの月の光を見られないのではないかと心配する。〈友への心情〉

〈詩形・押韻・対句〉　詩形―七言律詩。
押韻―「沈」（第一句）・「林」（第二句）・「心」（第四句）・「深」（第六句）・「陰」（第八句）・下平声十二・侵韻。
対句―第三句・四句、第五句・六句。頷聯のように「三五」と「二千」の数字の対応をしている対句を「数対」と呼ぶことがある。

訓読と現代語訳

①銀台　金闕　夕べ沈沈
②独り宿し　相思ひて　翰林に在り
③三五夜中　新月の色
④二千里外　故人の心
⑤渚宮の東面　煙波冷ややかに
⑥浴殿の西頭　鐘漏深し
⑦猶ほ恐る　清光　同じくは見ざるを
⑧江陵は卑湿にして　秋陰足る

①宮中の美しい高殿や門がしんしんと更ける夜に静まるころ、
②私は一人宿直して、遠い君に思いを馳せて翰林院にいる。
③八月十五日中秋の夜、昇り始めた月の光を眺めると、
④二千里の遠方にいる君の心情が思われる。
⑤君のいる江陵の渚宮の東の方では、もやや波が月光を受けて冷たく光っているだろう。
⑥私のいる宮中の浴殿の西側では、時刻を告げる鐘と水時計の音が静かに刻まれてゆく。
⑦（君もこの名月を見ているであろうが、それでも）私はなお心配する。この清らかな月光が、そちらでは私と同じように見えぬのではないか、と。
⑧君のいる江陵は土地が低く、湿気が多く（じめじめした土地で）、秋の空もくもりがちだというから。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。その際、対句に注意する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳する。
❺ 作者と、この詩の成立の背景について説明する。
❻ 対句表現を指摘し、それぞれの対句の表現上の特徴を理解する。〔**「言葉と表現」1**〕
❼ 全体の流れから、作者の友情の深さがどのように表現されているかを理解する。
❽ 詩形・押韻について、確認する。〔**「学習のポイント」1**〕

❶句中の切れ目がはっきりするように範読する。
❷七言律詩の詩形を理解し、対句がどこにあるかを確認させる。単元の中で最も字数の多い詩であり、対句の美しさに特徴があることに注意し、丁寧に音読させる。
❹漢和辞典を引いて、訳出させる。辞書で引かせる語句は、「銀台」「金闕」「相思」「故人」「煙波」「西頭」「清光」等。訳を作るのが困難であれば、辞書による調査に止め、おおまかな意味を考えさせておくだけでもよい。
❺「作者」をもとに簡潔に説明する。
❻(a) 首聯－華麗な宮中の建物の点描と、その中で一人で友を思う自分との対比。
(b) 頷聯－数字を軸にした対句。月の光と友の心を対比させながら実は両者を結び付け、友の心情を理解していることを示す。
(c) 頸聯－場所を軸にした対句。自分と友のいる場所を対比し、友の身の上を思いやる。
(d) 尾聯－友のいる江陵の地を集中して描き、月の光を友が見られないかもしれないという不安と、そうでないように祈る願望とを描く。
最終的には、(a)と(d)が対応し、自己のいる華麗な宮中のさまと、友のいるじめじめした江陵のさまとが対比されて浮かび上がる。「発問例」を参考に、対句について、どのような対比が見られるかを考える。
(a) 例えば、頷聯では「新月」と「故人」が対応しているが、「新」（あたらしい）と「故」（ふるい）という修飾語が見事に対称となっている。同じく「色」（目に見えるもの）と「心」（目に見えないもの）とが対称となっていて、目に見える月の「色」（光）によって、目に見えない友の

「心」を実感する作者の思いが分かってくる。

(b) また頸聯では、「渚宮」と「浴殿」が、宮殿の名前によって、二人のいる場所を対称的に表している。「東面」と「西頭」は方角を対比している。「煙波」は視覚的表現であるのに対し、「鐘漏」は聴覚的表現である等、豊かな対比によって奥深い思いを描いている。

❼ ❹ ❺をまとめ直し、全体が名月の光とからみあうように、友情が表現されたものであることを理解する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶【律詩】の詩について、まとめの学習活動を行う。

知技(2)イ、思判表B(1)ア・イ・ウ・エ　主態　**〔言語活動 1〕**

ア「春望」を書いた当時の杜甫の境遇と時代背景を調べる。

イ「八月十五日夜…」を書いた当時の白居易と元稹の境遇と時代背景を調べる。

ウ詩と時代の関わりについて、杜甫と白居易の共通点と相違点について考える。

❶**ア**…最初に、八世紀の中国の状況について、教科書や百科事典、中国史の概説書等を利用しながら、全体の流れを把握させる。さらに、この詩が至徳二載（七五七年）三月に作られたことを示し、その前年の六月、安禄山によって長安が陥落して玄宗が蜀へと脱出し、七月に粛宗が霊武（今の寧夏回族自治区）で帝位について至徳に改元したことに注意させる。杜甫の境遇としては、杜甫が粛宗の即位を聞いてそのもとに行こうとして安禄山の軍に捕らえられ、長安に監禁されたこと、家族は鄜州に疎開していたこと、さらにこの詩を作った後の四月、杜甫は長安を脱出して粛宗の行在所にたどりついたこと（「作者」の項参照）などを説明する。参考文献として川合康三『杜甫』（岩波新書、二〇一二）、指導者用として松原朗編『杜甫と玄宗皇帝の時代』（勉誠出版、二〇一八）、川合康三『杜甫』上（明治書院、二〇一九）を活用するとよい。

イ…白居易と元稹の歩みについて、彼らが進士に及第した貞元十六（八〇〇）年から、この詩が制作された元和五（八一〇）年まで確認をし（「作者」の項参照）、彼らが科挙による新興官僚として官位を上昇させつつ、権臣や宦官との軋轢もあり、それが元稹の左遷を招いた（江陵への左遷は、監察御史であった元稹が宦官仇士良と衝突したことによる）ことに注意させる。

白居易については川合康三『白楽天』（岩波新書、二〇一〇）など多くの参考文献があるが、元稹については、小川環樹編『唐代の詩人』（大修館書店、一九七五）、「デジタル版集英社世界文学大事典」（JapanKnowledge, https://japanknowledge.com）など限られているので、指導者が材料を提供するなどの工夫が必要になる。白居易と元稹の交遊については、太田次男ほか編『白居易の文学と人生２』

（白居易研究講座、勉誠出版、一九九三）が参考になる。また、官位への理解もある程度必要になるが、向嶋成美編『李白と杜甫の事典』「李白と杜甫の時代　二唐代の政治と官制」がコンパクトにまとまっていて、全体像を把握するのに役立つ。

ウ…杜甫と白居易の官僚としてのありかたの違いをまず把握させ、八世紀から九世紀にかけての時代の変化にも気づかせる。杜甫が皇帝から直接任命されているために、いったん皇帝が不在になれば孤立してしまう運命であるのに対し、白居易は元稹とともに受験勉強をして進士に及第しているため、皇帝権力の存在は大きいにせよ、国家の官僚として横のつながりがある。教材の二首の詩においては、「春望」が孤独のうちにうたわれているのに対して、「八月十五日夜…」は友へ呼びかける詩であるところに、そうした境遇の違いを感じ取ることができる。また、前者には戦乱による切迫感があるのに対して、後者には一定の秩序を回復した時期の叙情があることも、時代背景の違いを理解させるポイントとなるだろう。

【評価】 杜甫と白居易のの境遇と時代背景を踏まえて内容の解釈を深めているか、また二つの詩を比較する話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

● 一五三ページ

問 **第一・二句（首聯）について、**
A 作者のいる場所がどのように表現されているか、第一句・第二句それぞれについて述べなさい。
B 作者はどのような場所にいるのか、簡潔に答えよ。

答 A 第一句＝「銀台」「金闕」とあり、宮中の華麗な「台」「闕」などの建物群に囲まれている。
第二句＝「翰林」（翰林院）とあり、「翰林院」という役所にいるのだが、一瞬「林」の中にいるような静寂と孤独を感じさせる。
B 宮中の「台」「闕」などの建物群に囲まれた翰林院という場所（役所）。

補 この他にも「沈沈」で、宮中が月光の中に静まりかえっていること、「独宿」「相思」で、作者が孤独の中に友を思って宿直していることが考えられる。

問 **元稹は今どこにいるのか、詩中の語で答えよ。**

答 江陵

問 **「三五夜中新月色」（第三句）を現代語訳せよ。**

語句の研究

● 一五三ページ

1 八月十五日夜　旧暦中秋の名月の夜。時に元和五（八一〇）年八月十五日の夜、三十九歳の白居易は翰林学士として長安の宮中において宿直にあたり、親友の元稹は左遷されて江陵（湖北省荊州市）にいた。

1 禁中独直　宮中で一人宿直をする。「禁中」は、宮中。天子の居所。「直」は、とのい。宿直すること。

2 元九　元稹。「九」は排行（一族同世代の兄弟・いとこなどの年齢の順位）。七七九年〜八三一年。字は、微之。中唐の詩人。河南の人。貞元十六（八〇〇）年の進士。作者の親友で、このとき江陵（現在の湖北省荊州市）に左遷されていた。

3 銀台　銀台門。翰林院の南側の門の名。

3 金闕　金鑾門。翰林院の西隣の門の名。金鑾殿ともいう。ただし、「銀台」「金闕」どちらも、より広く、宮中の華麗な建築群を指していると考えることもできる。教科書では、後者の説に従い、「銀台金闕」で、「宮中の美しい高殿や門」と解した。

3 沈沈　（夜が）しんしんと更ける。

3 相思　（君を）思う。「相」は、下の動詞がはっきりとした対象を持っていることを示す助字。ここでは、「お互いに」という意味ではない。

3 翰林　宮中の役所の名。翰林院。当時作者は、翰林学士だった。翰林院は、天子の詔勅や上奏文を扱う宮中の役所。その詔勅作成を行うのが翰林学士。作者は、他の官職を兼ねて、この職に当たっていた。

4 三五夜　十五夜。掛け算の形でいったもの。

4 新月　夜空に昇り始めた月。現代日本語では、ふつう、「陰暦で、月の初めの頃出る月」を意味するが、ここでは違う意味である。

4 二千里外　二千里の外。二千里も遠く離れていること。「外」は、自分のほうから見て、（遠い）彼方。

4 故人心　友の心。「故人」は、古くからの知り合い、昔からの友人。ここでは元稹を指す。

5 渚宮　戦国時代の楚王の宮殿。元稹のいる江陵にあった。ここでは実際には、江陵の役所をいう。

5 煙波　もやが立ちこめた水波。もやのかかった水面。また、もやと波。

答　八月十五日中秋の夜、昇り始めた月の光よ。

問 ◉**「二千里外故人心」（第四句）とは、誰の、どのような心のことを言うのか。**

答　二千里もの彼方に遠く離れている友（元稹）の心を思う（友の心をしのぶ）、作者の心。

補　第三句は動詞「見」が省略されており、第四句は動詞「思」が省略されていると考えることができる。つまり「見二新月色一」と、「思二故人心一」のである。次のように板書してみてもよい。

（板書例）　見二三五夜中新月色一
　　思二二千里外故人心一

ただし、この他にも解釈の可能性はある。「昇り始めた月の清らかな光は、遠く離れた君の清らかな心そのもののよう（に輝いている）」とか、「昇り始めた月の光を、友も私を思う心で見ているだろう」等。体言だけで構成されている対句なので、解釈に広がりが出るのは、むしろ自然である。

問 **第七・八句（尾聯）について、**

1 **「猶恐清光不二同　見一」（第七句）とあるが、**
①(1)**「恐」、(2)「不二同　見一」の主語はそれぞれ誰か。**
Ⅱ**「猶恐」とは、(1)何を、(2)なぜ恐れているのか、分かりやすく説明せよ。**

2 **この二句（尾聯）は、作者のどのような思いを表しているのか。**

答 1
①(1)作者（白居易）
(2)元稹
Ⅱ(1)この月があなた（元稹）には見えないのではないかということ。
(2)あなた（元稹）のいる江陵は土地が低くて湿っぽく、秋に曇りの日が多いから。

2 元稹も今夜、同じように月を見ているだろうか、江陵は曇りで月が見えないのではないか、という不安感。それは、同じ体験（名月を見る）を共有できないのではないかという、孤独感・寂寥感でもある。さらに、そこに友（元稹）の身に、何か不吉なことが起こらなければよいが、という（不安を打ち消そうとする）願望・祈念も込められている。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

5浴殿　長安の宮中にあった宮殿。浴堂殿。翰林院の東南にあった。

5西頭　西の辺り。「頭」は、「辺り」の意。「浴殿西頭」とは、作者の宿直をしている翰林院をいう。

5鐘漏　「鐘」は、時を告げる鐘。「漏」は、漏刻で、水時計をいう。

6清光　月の清らかな光。

6卑湿　（土地が）じめじめしている。土地が低く、湿気が多い。「卑」は、低いこと。中国では当時、長安・洛陽を中心とする北方のほうが中央であり、政治・文化の中心だったため、南方の土地に対して、低湿で風土病の多い所と感じていた。

6秋陰　秋ぐもり。

鑑賞

大江維時『千載佳句』以来、とりわけ頷聯は日本でも人口に膾炙している。「学習活動のポイント」の「展開」の項で詳説しているように、「春望」とは異なって、散・対・対・散という標準的な律詩の構成をとり、整った印象を与える。散句である首聯においても、「銀台」と「金闕」、「独宿」と「相思」が対偶をなし、さらに第一句で宮殿、第二句で自身のすがたを描き出すという入れ子的な対偶構成をとりつつ、七言句による叙述の細やかさも確保している。頷聯と頸聯も対の軸が明確であることは詩の安定感に寄与している。

一方で、それに止まらない点もある。頸聯では、「渚」と「浴」、「波」と「漏」のように対になっている文字が水に関わる語となって、尾聯の「湿」への伏線を形成していることは、技巧として認めてよいであろう。そして尾聯は、始めの「猶恐」から結びの「足秋陰」まで、思いを伝える月光すらも遮られるかもしれない土地にいる友を案じる心で貫かれており、むしろ不安感が強調されている。首聯の構成とは明らかに異なっているのである。

つまり、七言律詩としてきわめて整った形をとり、月を介して思いを伝え合うという伝統的なモチーフを用いながら、それがかなわないかもしれないという不安を友の境遇への思いと重ねて、尾聯へと高めていく流れもまたこの詩の特色である。そしてその不安は友からの返事によって解消されるはずであった。

実際、元稹からは白居易の詩の韻字を用いた「酬二楽天八月十五夜禁中独直玩レ月見レ寄」（『元氏長慶集』巻一七）が返されている。だが、「煙霄」（もや）の向こうに月が見えにくいことが言及され、彼我の境遇の差をむしろ強調して、白居易の思いを素直に受け取る詩にはなっていないようである。憶測を逞しくすれば、結句は、江陵の自然を想像して描くのみならず、左遷された元稹の鬱屈した心情を思いやって重ね合わせようとしたものかもしれず、また、白居易にその意図はなくとも、元稹はそのように受け取ってしまったものかもしれない。この詩を元稹との詩の応酬の文脈に置き直せば、境遇の差が友情に波風を立たせかねないことも含めて、また異なったすがたが見えてくるであろう。

ちなみに元稹の返詩は、用韻詩、すなわち白居易の詩の韻字を順不同にすべて用いた次のようなものであった。

酬二楽天八月十五夜禁中独直玩レ月見レ寄（楽天の八月十五夜禁中にて独り直し月を玩びて寄せらるに酬ゆ）

一年秋半月偏深　一年秋半ばなれば月偏へに深し
況就二煙霄一極二賞心一　況んや煙霄に就きて賞心を極むるをや
金鳳台前波漾漾　金鳳台前　波は漾漾たり
玉鉤簾下影沈沈　玉鉤簾下　影は沈沈たり
宴移二明処一清二蘭路一　宴は明処に移り蘭路を清め
歌待二新詞一促二翰林一　歌は新詞を待ちて翰林を促す
何意枚皐正承レ詔　何の意ぞ枚皐　正に詔を承るに
瞥然塵念到二江陰一　瞥然として塵念　江陰に到るとは

一年でも仲秋となれば月の趣は深い、まして高い空の雲を従えてその美しさを愛でるのならなおさら。宮中の金鳳台の前に波は揺れ、玉鉤の簾の下に影が静かに映っていることだろう。宴は明かりに照らされた広間に移り帝のお出ましになる

道を清め、歌は翰林学士の君が新たにつける歌詞を待つばかり。かの漢の武帝の寵愛を受けた枚皐よろしく詔を受けようとする時に、君はなぜまたふと浮んだ雑念を長江南岸の地に寄せてくるのかね。

冬至に向かうにつれて満月の南中高度は上がるので、それも「月偏深」とする背景にある。また「煙霄」には比喩として高位を指す例が白居易の詩にもあり、ここにもそうした含意があろう。つまり宮中の宴で月見を楽しむ白居易を自分とは立場の違う者として最初から描き、頷聯と頸聯も長安の宮殿の華やかなさまをうたい、尾聯に至って、どうしてまたそんな君がこんな境遇の私に詩など送るのかね、と言うのである。

「何意」は、君はどうして、でもあるし、思いがけないことに、の意味にもなるが、ここは屈折をこめた前者と考えておく。ちなみに、「瞥然塵念」という語は、元和十（八一五）年、つまりこの詩の五年後に、江州（江西省）司馬に左遷されていた白居易が通州（四川省）司馬であった元稹に送った有名な書翰「元九に与ふる書」にも使われており、白居易にとって胸に刺さったことばだった。元稹の詩に屈折したところがあるにしても、白居易はそれも受け止めていたようで、そうしたところが彼らの友情を長続きさせたのかもしれない。